

米空軍兵のボランティア活動、鹿屋のコミュニティーを活性化

USAF volunteer efforts uplift Kanoya community

June 7, 2023

By Staff Sgt. Spencer Tobler
374th Airlift Wing Public Affairs

海上自衛隊鹿屋航空基地に展開している第319遠征偵察中隊(319ERS)と第374空輸航空団のメンバーは、2022年10月の到着以来、日米の情報・監視・偵察能力を支援する主要任務に加え、地元地域に奉仕するためにこれまで数百時間ものボランティア活動を行ってきた。

319ERSが到着した当初、米軍が鹿屋に駐留することに躊躇いの声があったものの、配属中のメンバーが地元地域で築いてきた人と人とのつながりは大きな支持を得ている。

319ERS前任下士官スティーブン・ピーターソン曹長は、「ホスト国の人々が生活し働く場所を、我々がいかに心にかけているか部隊の空兵たちが行動で示していることにとっても感謝している」と述べ、「このミッションに携わる男女は、大小にかかわらず地域社会の助けとなるあらゆる機会に積極的に参加している」とコメントした。

同中隊は、コミュニティーに価値のある影響をもたらそうと、地元住民との関係構築を優先してきた。その活動の例には、鹿屋市福祉協会への寄付、障がいのある子どもたちへの週1回の英語教室、地域の美化を保つための月1回のビーチ清掃活動などがある。

車両整備給油職人エガブリエル・ロスバート上級空兵は、「周辺地域に良い影響をもたらすことは、現地の人々が抱きうる先入観を打ち破る最善の方法だと思う」と語り、「他国にいる間のそうした活動は、アメリカ人の前向きな印象を残すことができるだろう」と述べた。

また、319ERSの空兵は、鹿屋航空基地に駐留する海上自衛隊とも頻繁に連携している。共に基地内清掃や児童養護施設での活動を行うなどし、また航空慰霊祭を執り行った際には1万8,000人以上の参列者を集めた。

さらにピーターソン曹長は、「カウンターパートである海上自衛隊が、コミュニティーを支援するための扉を開いてくれた」「暖かく迎え入れられているからこそ、地域活動へ参加することで、我々がコミュニティーを大切にし、自らの時間をいとわず地域に貢献したい気持ちが伝わることを願っている」と述べた。

空兵たちのコミュニティーへの奉仕活動は、鹿屋市、海上自衛隊、米軍間の相互理解の環境構築に役立っている。

ピーターソン曹長は、「鹿屋では、我々は極少ない外国人だ。地元の人々と楽しんでボランティア活動することで、交流も図れる」「空兵たちがコミュニティーにもたらすプラスの影響は、世間の誤解を解き、滞在する間の良いゲストであるための信頼の向上につながっている」と述べた。

